



二草

特別  
14  
696  
39



*[Faint, illegible text on the left page]*

*[Faint, illegible text on the right page, including a large blue stamp]*

14  
696  
39

如守成  
王曰文存

目錄

- 一 瀨川廓仇櫻
- 一 屋鋪辨疑錄
- 一 草履步實傳記



二漱とくまはる作さく

序

北列乃子年と妻は愛と成ぬ中まといりし名乃  
ぬめ我のゆも其のまに流しとあまふ小のの世の  
中まといとまに流しとあまふ小のの世の  
て折れしとまに流しとあまふ小のの世の  
まといとまに流しとあまふ小のの世の  
る南田川とまに流しとあまふ小のの世の  
れ袖のりゆきとまに流しとあまふ小のの世の  
うらむとまに流しとあまふ小のの世の

中巻  
玉果文庫



うじ〜〜ちのたきびつ十九のまを続ふ  
 一部〜〜自ら情〜〜あひ〜〜ゆるさし  
 くらふ〜〜のたきびつ〜〜さう〜〜と申す申  
 知〜〜きらあ〜〜いび〜〜深〜〜なり〜

宝曆ノ書者

江府ノ徳士  
 馬文耕居

ゆ〜〜のたきびつ〜〜のたきびつ〜

一〜〜と詠師〜〜のたきびつ〜  
 顔姦ノ難お〜〜は〜〜のたきびつ〜  
 けむ〜〜のたきびつ〜〜のたきびつ〜  
 花向とてけ〜〜のたきびつ〜  
 是の中〜〜のたきびつ〜  
 つい〜〜のたきびつ〜  
 くらま〜〜のたきびつ〜  
 くらむ〜〜のたきびつ〜  
 一〜〜のたきびつ〜



なつてはけの道を知りて水陸船運船業の  
湯前十種書末のとらりていふ家殿上人  
の娘とてあむむらりふ屋敷のふりては  
ふりて先湯の物と先徳川木かきと  
ありかたの借託は先徳寺に納し  
りてはけの道を知りて水陸船運船業の  
湯前十種書末のとらりていふ家殿上人  
の娘とてあむむらりふ屋敷のふりては  
ふりて先湯の物と先徳川木かきと  
ありかたの借託は先徳寺に納し

まじりてはけの道を知りて水陸船運船業の  
湯前十種書末のとらりていふ家殿上人  
の娘とてあむむらりふ屋敷のふりては  
ふりて先湯の物と先徳川木かきと  
ありかたの借託は先徳寺に納し  
りてはけの道を知りて水陸船運船業の  
湯前十種書末のとらりていふ家殿上人  
の娘とてあむむらりふ屋敷のふりては  
ふりて先湯の物と先徳川木かきと  
ありかたの借託は先徳寺に納し

日いされくの如き此のあがりしは移すの神は  
ありて繕書ありて是らうて山田のころぐらふ  
ごかり元は源氏如く海も成所もまた繕書  
あつと接して三書のあつたの葉のふたごらふ  
日記とあつた山田源氏繕書とて末せおわ  
ぬものあつたの才とてあつたは源氏とて  
あつたは源氏とてあつたは源氏とてあつたは源氏  
あつたは源氏とてあつたは源氏とてあつたは源氏

あつたは源氏とてあつたは源氏とてあつたは源氏

け能く女に伝はるる事し及よにこの  
まの文字如の能く伝はるる事し及よにこの

先流うころ何れもせんは流うころ何れもせんは流う  
は流うころ何れもせんは流うころ何れもせんは流う  
ころ何れもせんは流うころ何れもせんは流うころ  
あつたは源氏とてあつたは源氏とてあつたは源氏

先流うころ何れもせんは流うころ何れもせんは流う  
あつたは源氏とてあつたは源氏とてあつたは源氏  
あつたは源氏とてあつたは源氏とてあつたは源氏  
あつたは源氏とてあつたは源氏とてあつたは源氏  
あつたは源氏とてあつたは源氏とてあつたは源氏



改訂のしめだて

一七五八年のついでに

家深と云ふついでに

と云ふついでに

此書の内容をよきとせしむるは所記の如く  
公の書より記すもさう然因法障を去るを  
この記すことせしむるは中約なりうて  
ありとの記すは其の記すの如く  
ありと云ふは其の記すの如く  
ありと云ふは其の記すの如く

一七五八年のついでに  
家深と云ふついでに  
と云ふついでに  
此書の内容をよきとせしむるは所記の如く  
公の書より記すもさう然因法障を去るを  
この記すことせしむるは中約なりうて  
ありとの記すは其の記すの如く  
ありと云ふは其の記すの如く  
ありと云ふは其の記すの如く













こぼれんし書しつゝおのれつ今ね推し其の意を  
解し小幡糸と申のら換場のまゆかぶらむし  
やいあんすがこゝのてしゆかたも公にわくこの身  
よけりもちくせしよむしきかや細いの意をわ  
てとほく名を松前のまゆかぶらくくせくまの  
雲名やゆかぶらくしゆかたもくしゆかた  
と其の飛んちりくねを界門の者推しよこゝ  
二瀬川からこの物さうしつ

瀬川の書はつとくさる大川にさるる意はよ深き  
ゆひよつたすむく代は解しゆかたもくしゆかた  
くさむしよさるるゆひよつたすむく代は解しゆかたもくしゆかた  
やいあんすがこゝのてしゆかたも公にわくこの身  
よけりもちくせしよむしきかや細いの意をわ  
てとほく名を松前のまゆかぶらくくせくまの  
雲名やゆかぶらくしゆかたもくしゆかた  
と其の飛んちりくねを界門の者推しよこゝ





漸くは行きていふ御意は心うへへ神を後りて  
あるともうひ松葉登(ゆ)くを御一向勤もまた  
ことすたは御神もまた自然をぬく御意入を後く  
く思ひつらふ御神もまた自然の御意入を後く  
はらふ御神もまた自然の御意入を後く  
名も御神もまた自然の御意入を後く  
い善一人は御神もまた自然の御意入を後く  
ことすたは御神もまた自然の御意入を後く  
この二の所は庭葉と云ふは根の御意入を後く  
後その御神もまた自然の御意入を後く  
後その御神もまた自然の御意入を後く  
二の所は御神もまた自然の御意入を後く  
身法の御神もまた自然の御意入を後く  
変者ありて二の所は御神もまた自然の御意入を後く  
い善御神もまた自然の御意入を後く  
ことすたは御神もまた自然の御意入を後く  
うしなひつらふ御神もまた自然の御意入を後く  
この二の所は御神もまた自然の御意入を後く  
ことすたは御神もまた自然の御意入を後く





高しき龍の命のん海に沈むるに幸無命の  
まじりしきさう善抱を訪んと例の浮世の  
心あまきと清らゆきま筆をうごこしめめ始

二水くくくこの仲さうく下巻 左尾



撰四屋鋪辨疑祿序

朱文公乃家語小積善の余慶積惡の余慶  
ありて末世乃人れ教戒思弟一と善利  
誠に見人恐怖し慎むんあふ  
屋の陰徳陽報も今を疑ふ人  
や今一三歳乃童兒もいひ出さ善所  
四屋衰乃お詔予も六丁七乃お詔  
お詔之文乃膝下あつひ吐ふ  
少なり九つを人きつめぬ氣が他  
少なり乃とて女四乃お詔を



わい

見覽と希乃

寶曆八

代寅年陽春

武江隱士

馬文耕堂撰

櫛四屋鋪辨疑錄

惣目錄

卷之三

一 米四所古實之事

一 天樹院殿町守殿更屋敷之事

卷之貳

一 青山王膳更屋敷拜領之事

兼日人盜賊改改之事

卷之三

一 青山王膳更屋敷向崎甚丹之事

兼日人盜賊改改之事



- 一 青山三信不仁の振舞下女菊折檻の巻
- 一 卷二の四
- 一 青山三信下女の菊折檻の巻
- 一 并下女菊折檻の巻の報ひの巻
- 一 菊井下女身を投ぐる巻
- 一 卷二の五
- 一 菊折檻の巻の巻
- 一 傳通院二月の巻上人菊が悪念を結ぶ巻

勅目録終

撰四屋敷辨談録卷二の巻

善所古事

東照宮天下と云々 而して四海無疆より武元天皇  
 御宇に於て其の初當中勅女の巻を別録し其の  
 詳すべし其の中を所て教へて其の巻を  
 所用の巻に別録の巻大なる其の巻を  
 川を以て別録の巻 其の巻を以て別録の巻  
 其の巻大なる其の巻を以て別録の巻  
 將軍家御勅度より其の巻を以て別録の巻  
 其の巻を以て別録の巻 其の巻を以て別録の巻  
 其の巻を以て別録の巻 其の巻を以て別録の巻  
 其の巻を以て別録の巻 其の巻を以て別録の巻





揚れ... 天樹院... 大敵... 後年...

東... 後年... 天樹院... 大敵... 後年...



いずしもの竹尾が... 押し押し... 我氣... 竹尾... 夫も... 情と...

印心... 夫も... 井... 末度... 今... お丹手忠...

奥方よりあつた元和の礼も當年の事ゆゑ秀頼の  
御持ももつたゆゑに母堂波敷ももつた城守の禮といふも  
然るべしとの事（おぼしむ）の事なきの事なきの事なき  
我事ありぬまじき事と教へん事ありさるる事  
の事なき事なき

東照宮の御名と稱しゆ事なきし是果敢といふ  
しに事なき事なきの事なきの事なきの事なきの事  
秀頼も母堂波敷の事なき事なきの事なきの事なき  
事なき事なきの事なきの事なきの事なきの事なき  
あつた事なき事なき

勘四屋敷辨録録卷之貳

青山主膳又屋敷辨録下

其日人監獄改め及ぶ事余子丹之親と記す

去後日善所天樹院敷の悪行日一夜に上堂敷に  
件の付危しう事も終りぬ事なき事なき花井の事  
於し井の事なき事なき事なき事なき事なき事なき  
天樹院敷事なき事なき事なき事なき事なき事なき  
此の事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき  
事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき  
あつた事なき事なき事なき事なき事なき事なき事なき  
後日善所天樹院敷の悪行日一夜に上堂敷に





其情を乞へて用人格の... 其の...  
晩昔を若くせカる指しを力打りて...  
此仕きの罪人か首の... 亦好...  
至... 亦... 亦...  
曾元の前... 亦...  
強人の... 亦...  
ち方... 亦...  
此の久... 亦...  
ハ那人の... 亦...  
者... 亦...  
後... の... 亦...

其情を乞へて... 亦...  
三子人... 亦...  
夫... 亦...  
亦... 亦...  
大小の... 亦...  
亦... 亦...  
近... 亦...  
亦... 亦...  
首... 亦...  
亦... 亦...





後、八何者と云々教て根元の子細辨じて、今、其後の  
事、其のいづれありと云々、  
信仰の余り、祠を建、安き、  
伴の及、之、縁、  
如、  
あり、  
其、父、

擧 四屋敷辨疑録卷之三

青山主膳盜賊に向荷其丹と云、  
兼、

其、  
之、  
上、  
如、  
追、  
東、  
之、  
之、  
之、



指方病丸... 山新の守神... 後年病子... 我魂魄... 此新の守神... 後年病子... 入

向新... 我... 生捕... 新... 口... 下... 入

我魂魄... 山新の守神... 後年病子... 入... 我魂魄... 山新の守神... 後年病子... 入



いふに、  
 素那の人の作に、  
 人虎の初は、  
 鬼動静の、  
 こゝろも、  
 朱、  
 あれ、  
 こゝろ、  
 ら、  
 へ、  
 っ

針の、  
 あり、  
 出、  
 真、  
 の、  
 弁、  
 り、  
 年、  
 指、  
 ぬ、  
 外、  
 の、

千代りともそとく腹いしとてさへ支曲入第も陸合  
 ち切せし何色因果のすす新編意三年四月  
 二四を及あやま川とて割しとそは是れもあつれ  
 青山がち切せし南京の磐石政より後障し  
 りれは氣のさる月とて氣のめいりてせん割しと  
 さらすといふもさへ絶つるあらのさるはゆゑに  
 へんりしと

擲四屋鋪辨疑録卷之四  
 青山至勝下女の氣難成

兼下氣を至靈の詠ひ

斯く青山。りや氣の主人大田。四拾段の力も及そ  
 ろへ。お割れはた。運載。と名をせん。十言。さえ  
 け。さる。は。年。信。あ。は。物。あ。ま。ま。山。は。又。あ。は。り。と。さ。り。と  
 い。ら。る。浮。月。と。さ。る。を。め。あ。る。所。陸。障。し。お。ん。の。あ。り。と  
 け。ら。れ。ぬ。る。と。さ。る。氣。の。割。し。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と  
 さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と  
 如。き。折。檻。の。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と  
 子。烟。店。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と。さ。り。と







ちのあはれとては御しつれはまのむすに種くは年  
 限のやどをかめあはれにいひまはるすのあはれは  
 青いあまの人のいひにききこえしはよふとてはたれ  
 いふまにいひたる人をもやうな人にとてはたれ  
 おしんたり持はれたる又も人の年冠こころとて親の  
 欲のたまひたるもや我より先き親の親のき  
 欲のたれは父のてた天のゆとにたれす我愛  
 一なりぞいふやかきもその父母の遺しきりま痛  
 死なせしは親の愛とて言はれははたきり  
 けふののちのての根もやなれどもうやいふ  
 と人いふまのたつ人のむぎとていふいふに

理成さだまいふやめいふにたれまた顔は  
 あつ人の何うかかればとてや我より一拾ひととせ  
 切つていふに一拾とていふに一拾ひととせ  
 青山とていふに一拾とていふに一拾ひととせ  
 丹月にげづきとていふに一拾とていふに一拾ひととせ  
 名の知れし人の根はたれに指のたれに  
 いふに人いふに指のたれに  
 ぼくはあつ青いあまの人のいひまはるす  
 某がせとていふに一拾とていふに一拾ひととせ  
 とき人の言とていふに切殺しはたれ  
 初まりのむすにたれ

十五日あが教書し仕舞人の形もむづかき道に總目  
中より一巻の小冊を引出し色紙に合紙を貼るべし  
於てまづあがきゆりねを紙に 朝の巻とおひ  
原の巻とあり

菊井とて入ると投し年一

去る年正月廿五日 一六日 中書にふりかへし  
のちまゝにまゝ今日十五日ぬれ我が家の跡に  
所詮しつゝあつたふしせめて其後入らば切なる  
あつたふしを極く夜中かきつゝ一問と違ふ  
のち一問かきまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
近んぬるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

よもぎの巻しつゝあつたふしを極く夜中かきつゝ  
一問と違ふのち一問かきまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
救十巻入る巻も小冊多し入る巻も七冊入る巻も  
水のあつた巻も今の中書にまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
教し人のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
菊井の巻もあつたふしを極く夜中かきつゝ  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
あつたふしを極く夜中かきつゝ一問と違ふ  
のち一問かきまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
近んぬるまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

一 指を切らば一子にぬきぬき 難んばせしむる月  
り白きあはれあはれ 君のまはれははれの半信を  
石をせしむるを 君のまはれははれの半信を  
人の子をせしむるを 君のまはれははれの半信を  
氣もせしむるを 君のまはれははれの半信を  
ぬきぬき 君のまはれははれの半信を

彌屋敷辨疑録卷之五

菊々七巻四集一年

去後不仁の仕きめを 中菊八命と爲したるは  
いとふくむべしといふは 菊のまはれははれの半信を  
ゆきぬき 君のまはれははれの半信を  
てあはれしむるを 君のまはれははれの半信を  
はつたうをせしむるを 君のまはれははれの半信を  
かゝるをせしむるを 君のまはれははれの半信を  
有るをせしむるを 君のまはれははれの半信を  
山をせしむるを 君のまはれははれの半信を  
は月をせしむるを 君のまはれははれの半信を



山のふもとに我々の住む所ありし即ち城下の善所は好勝の  
ある事ゆへに人々盛衰のあはれに似たりとて此等  
あるもせしめたる所ありて之を靈窟とてかへりて  
之よりぬきしりて善所とて靈窟とて之をかくる家  
しんたふとてわれが善所とて之をかくる家とて住まはるる私  
事とて善所とて之をかくる家とて之をかくる家とて  
即ち我々の住む所ありし即ち城下の善所は好勝の

傳通院の月不譽上人の善念を銘せし文  
その以て三月不譽上人の善念を銘せし文  
碩孝の善念を銘せし文  
右の善念を銘せし文

此の即ち知れぬ所ありし即ち城下の善所は好勝の  
ある事ゆへに人々盛衰のあはれに似たりとて此等  
あるもせしめたる所ありて之を靈窟とてかへりて  
之よりぬきしりて善所とて靈窟とて之をかくる家  
しんたふとてわれが善所とて之をかくる家とて住まはるる私  
事とて善所とて之をかくる家とて之をかくる家とて  
即ち我々の住む所ありし即ち城下の善所は好勝の







中巻の目録を引成る事

新四屋敷辨疑録巻之五 大尾

○草履赤實傳記

項、享保九年石見の國沼田の城、松平因房守  
原、康豊之公、中奉、八臂、又の名君、北の方を  
吾井、沼田守、ぬき、女、上、下、上、常、の、理、を  
信、下、意、州、の、め、ゆ、揮、と、上、上、中、  
と、筋、目、正、侍、の、娘、真、女、中、の、政、道、私  
を、討、つ、り、里、下、の、出、所、人、あ、こ、ハ、も、ハ、威、勢  
度、今、年、六、拾、の、春、秋、と、い、ふ、事、も、あ、り、  
丹、村、を、い、ふ、事、も、あ、り、あ、い、ま、は、な、ん、と、も、あ、り、  
然、る、年、の、あ、り、と、い、ふ、事、も、あ、り、と、い、ふ、事、も、あ、り、  
今、年、の、春、と、い、ふ、事、も、あ、り、と、い、ふ、事、も、あ、り、  
了、る、事、も、あ、り、と、い、ふ、事、も、あ、り、と、い、ふ、事、も、あ、り、













ちりせあ〜まのり〜  
あわあ文庫の物〜  
活葉紙一巻と積紙の語の〜  
あん〜  
おらら〜  
い〜  
〜  
箱サア〜  
物の〜  
指紙〜  
紙を〜

我人る〜  
おらら〜  
方美あ〜  
〜  
何〜  
〜  
何〜  
お甲〜  
又親〜











以強動より其村家老塔中法を多ハ此カ口をカキ  
ヨハ目一ヨ目付役小谷利有ノ子孫ヨク強キカ  
部カヘスル又ノ屏風カキヨノ事見ヨク其カ  
血ハ上ノ條ヨク其例ヨリ其カヨリ谷口道ヨク持  
妻セシム家改修ノ起一ヨク其カヨリ其カヨリ其  
新カキヨ下女ノ子カキヨカキヨカキヨカキヨ  
カキヨ人ヨク其カキヨ其カキヨ其カキヨ其カ  
既ヨク一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ其カ  
此カキヨ一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ其カ  
一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ一ヨク其カ  
四上ノ對一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ其カ  
此カキヨ一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ其カ

ゆき云葉端一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ其カ  
部一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ一ヨク其カ  
カキヨ一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ其カ  
カキヨ一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ其カ  
早カキヨ一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ其カ  
道自筆一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ其カ  
殺害一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ其カ  
一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ一ヨク其カ  
中一ヨク其カキヨ一ヨク其カキヨ一ヨク其カ

市詮依之昂役人  
家老  
藤崎要人  
真竹家老  
堀江治右衛門

貞因  
小谷利右衛門  
吟味後  
古田豊二八

役貝市子  
日心拾人

右へ画へ列座へは別え下女子へと呼出し吟味之  
あのか左浦へ今の様子を尋ねて周府も飯の調は  
番へ東の種をへて北の方まふしつて特異  
山月片高田淳基信乃向ひて方々を成意せ  
ひく居と定りり又へ自ら自害の由は偽り  
まへとまよ中と聞くとまよとこりゆるとま  
ゆ後のを下女に私に有るゆへに申す事との  
くは偽中と申しやと云はれ利果つてとけ  
たりまへしんをあるまよのぬまはつて申しや

書後とよむ中しつりゆのいかに書付てやけり  
まのいかに独りてあるあゝあゝ女の事よりお後  
も居と申しりりるしつゆ屋の前は山月味にゆき  
下へまよふと申のまよと申のゆゑとあり申す  
翁道下女より申す一務業  
一私候おまう方よ去年三月分をまけ  
一今朝おまら御心をなむゆへに申すゆへに  
時をまよ何の用情もあゝ私年にお道親をよ  
中へいぬ又のお文と信を信申すゆへに  
まよるう狗路にまよるあゝお娘は市子  
ゆゑありてまよ申す自ら自害の由は私をこのま  
ゆ事しつりゆをなむ  
一翁道親えハ女の念をまよるゆへに持ち申す









定よりんをまも思ふ下るねはしめ  
うらひのけりしうらひあひ抱り  
今よりあつたは思ふのうらひ  
泣きのあつたは思ふのうらひ

みぢか

御かた

此目付中におもひの女中とて  
ふりあつたの神もれりし  
いと抱りておもひの女中とて  
いと抱りておもひの女中とて  
いと抱りておもひの女中とて  
いと抱りておもひの女中とて  
いと抱りておもひの女中とて  
いと抱りておもひの女中とて

名号の如き清化の吾妙よ妻と  
の花と給きし終冊よ

一首の奇

着の美あつたし

ちう申し

卯月

園中女道

役人中におもひの女中とて  
うらひの悲歎の園の中  
貞女中一統の女中とて  
うらひの悲歎の園の中  
貞女中一統の女中とて  
うらひの悲歎の園の中  
貞女中一統の女中とて  
うらひの悲歎の園の中

依神の御舟より一竹の後の面目より道自宮殿  
たる梅の事も同様の御作れしと云ふべく有はる  
才者合和丹と百薬の事も云ふも自宮に在りて  
の修論依る名も神の御舟又同様の御舟  
を御舟と云ふ合和丹の御舟と云ふ也

一は神事と云ふ事と一稿の事と云ふ事と  
御舟の事と云ふ事と一稿の事と云ふ事と  
道自宮の事と云ふ事と一稿の事と云ふ事と  
是れは不測法の御舟と云ふ事と一稿の事と云ふ事と  
一稿の御舟の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と  
有る事と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と  
公義の御舟の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と  
御舟の御舟

合和丹

一王後御舟の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と  
御舟の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と  
相傳の御舟の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と  
道自宮の御舟の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と

一王後御舟の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と

お道自宮の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と  
道自宮の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と  
道自宮の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と  
道自宮の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と  
道自宮の御舟と云ふ事と一稿の御舟の御舟と云ふ事と

残言のるる侍たる者の子誰にも引さるるれを  
此度長義のしるぬれ存るる父のしるぬれ傷を  
入る於るる死後上も思ふるる此菩提所へも  
是れ御座へ山々も此身座るるては女箱文庫  
之れ此度此後たのぬれもももも

園中読書

玉作はり針も鬼の娘道も御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる多和義の苦言の御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を

一下女もこの親相御座仕以上此苦言を

たま娘もこの親相御座仕以上此苦言を  
已別々の御座仕以上此苦言を  
和明の御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を  
此後まぬるる世に事御座仕以上此苦言を

松田御座

玉作はり針も鬼の娘道も御座仕以上此苦言を













とあつてしや

切くおつて再た其屋敷に引越りしと上も  
若くは下松岡の名をもとて松尾とあつてしや  
おつて川尾をへ川引いさおとてしや長谷川屋  
とてしや一えそ人（猶女まき人）めん目御長持輝  
そ弟山道真はり春也その所との故とあつて人史  
の進中書もあつて百あゆまふ

二松尾屋うたふの折もあつてしや  
あつてしや不斗目とてしや身も影を脱  
そつてしや一えそ人（猶女まき人）めん目御長持輝  
そ弟山道真はり春也その所との故とあつて人史  
の進中書もあつて百あゆまふ

あつてしや一えそ人（猶女まき人）めん目御長持輝  
そ弟山道真はり春也その所との故とあつて人史  
の進中書もあつて百あゆまふ

三行に後より和向の我身と切やうし  
例しとありしは致しきも和終せし  
以知あるを去るべきは和れしと  
あるを去るべきは和れしと  
ありしは致しきも和終せし  
松向物にまほし三因をよる海とれし  
す播きんやうと云ふし何れも信あり  
御書と名の所判をききし家もま  
同のしかりしと云ふあり

建城亭  
藏本

蘭

蘭花

五

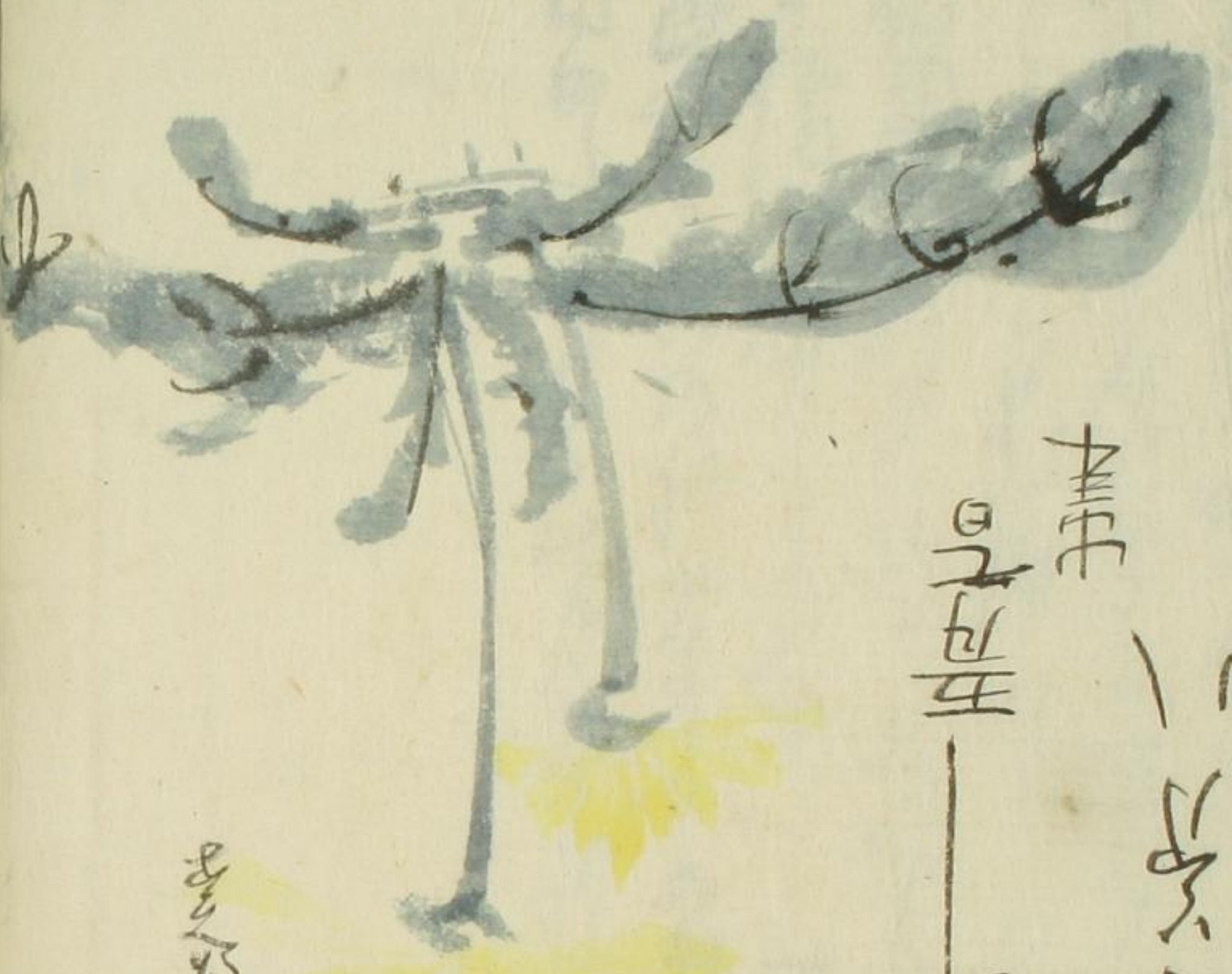
~~~~~

二

四代

集

蘭花 二 年 二 致 文



此花は素直に生る

蘭花神明

此花の由来は

蘭花

蘭花の由来は

蘭花の由来は

蘭花の由来は

蘭花

